

ことばの波止場



NINJAL Research Digest

vol. 11
2022.3

ONLINE NINJAL フォーラム 2022

対照言語学の観点から見た
日本語のプロソディーと
動詞意味構造

国立国語研究所
理論・対照研究領域
窪園晴夫・松本唯

ONLINE NINJAL フォーラム 2022

統語・意味解析コーパス (NPCMJ) から
見えてきたこと
ー日本語テキストにおける主語省略文と
受身文の使用ー

ブラザント・バルデシ (国立国語研究所)、長崎郁 (名古屋大学)



ONLINE NINJAL フォーラム 2022


言語の記録保存と継承保存、
どちらも「いまやるべきこと」

記録保存：博物館にその言語の記録が残る

- ・参照文法、辞書、談話テキスト
- ・言語の体系的な理解

継承保存：その言語が世代を超えて継承される

- ・母語として獲得する子ども
- ・個人の寿命を超えた世代間継承の再開と維持



ONLINE NINJAL フォーラム 2022

コーパスを通して
日常のことばの特徴を探る


小磯花絵
国立国語研究所 音声言語研究領域



ONLINE NINJAL フォーラム 2022

日本語学習者による
多義語の意味推測ストラテジー


石黒圭
(国立国語研究所 日本語教育研究領域)
2022年2月19日 (土) 15時40分～16時15分



ONLINE NINJAL フォーラム 2022

『日本語歴史コーパス』
ができて分かったこと


言語変化研究領域 小木曾智信



ONLINE NINJAL フォーラム 2022

リアルタイムMRI動画を用
いた調音音声学の再構築
ーワ行子音の問題ー


コーパス開発センター・音声言語研究系 教授
前川 喜久雄



ONLINE NINJAL フォーラム 2022

消滅危機言語・方言を
記録し、継承する

言語変異研究領域 木部 暢子/山田 真寛



特集

ここまで進んだ！
ここまで分かった！
国語研プロジェクトの今期の成果

研究者紹介
著書紹介

特集:①多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓6基幹プロジェクト
対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法(プロジェクトリーダー 窪田晴夫)

日本語と世界の言語のとりたて表現

野田尚史

NODA Hisashi



「とりたて表現」とは

「とりたて表現」というのは、「朝はバナナだけ食べた」の「だけ」のように「それに限られる。他は違う」という意味を表したり、「この島にはホテルまである」の「まで」のように「極端なものである」という意味を表したりする表現です。

英語に「only」や「even」があるように、どの言語にもとりたて表現があります。しかし、他の言語では日本語ほどとりたて表現がよく使われないため、とりたて表現の研究はあまり盛んだとは言えません。

助詞で表すか副詞で表すか

日本語や韓国語、ヒンディー語などでは、「とりたて」を表すのはとりたての対象の後に付く「だけ」「さえ」「も」のようなとりたて助詞が中心になります。

一方、英語や中国語、インドネシア語などでは、「とりたて」を表すのはとりたての対象の前に置かれる「only」「even」「also」のようなとりたて副詞が中心になります。

とりたてを主に助詞で表すか副詞で表すかという違いは、それぞれの言語の語順と関係があります。「真理は大きな帽子を買った」のように述語が文の最後に来る言語では、主にとりたて助

詞が使われます。一方、「Mary bought a big hat」のように述語が文の最初の方に来る言語では、主にとりたて副詞が使われます。

際立たせるかぼかすか

日本語のとりたて助詞が表す意味は、次の表のようにまとめられます。

限定 「だけ」「しか」	反限定 「でも」「なんか」
極端 「まで」「さえ」	反極端 「なんて」「ぐらい」
類似 「も」	反類似 「は」

表の左の列にある「限定」「極端」「類似」の意味を表すとりたて表現は、日本語以外の多くの言語でもよく使われます。この中でも特に「限定」と「極端」は「それに限られる。他は違う」とか「極端なものである」というように、とりたて対象を際立たせる働きをします。

それに対して、表の右の列にある「反限定」「反極端」「反類似」の意味を表すとりたて表現は、日本語以外の言語ではそのような表現形式がなかったり、あってもあまり使われなかったりすることが多いです。「反限定」は「それに限らず、それに似たものも含む」という意味を表し、「反極端」は「極端では

なく、ごく普通だ」という意味を表し、「反類似」は「同じではなく、違う」という意味を表します。特に「反限定」と「反極端」は、とりたて対象を際立たせるのではなく、その反対、つまり、ぼかすような働きをします。

ことばで表すかどうか

日本語ではぼかすためのとりたて表現が発達していますが、これはぼかすときにはぼかすことを律儀にことばで表現することが他の多くの言語に比べて多いということです。

日本語で「コーヒーを飲みましょう」と言われると、コーヒーを飲めない人は「コーヒー以外も飲めるのかな」と心配になるかもしれません。コーヒー以外も含まれることを表すときには「コーヒーでも飲みましょう」とぼかすための「でも」を使うのが普通だからです。他の多くの言語では、「コーヒーを飲みましょう」という表現がコーヒー以外を含むという意味で使われやすいようです。

さらに詳しいことは、野田尚史(編)『日本語と世界の言語のとりたて表現』(くろしお出版、2019)をご覧ください。できれば幸いです。

(野田尚史/日本大学教授・国立国語研究所名誉教授)

特集:①多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓6基幹プロジェクト
 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究(プロジェクトリーダー プラシャント・パルデシ)

NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese (NPCMJ): 書きことばの使用実態がわかるコーパス

プラシャント・パルデシ / 吉本啓 / 長崎郁 / アラスデア・バトラー

Prashant PARDESHI

YOSHIMOTO Kei

NAGASAKI Iku

Alastair BUTLER

統語・意味解析コーパス

言葉を文字で書きあらわそうとすると、文字が一直線にならぶだけです。ところが実際には、言語は直線ではなく階層的な構造を作っています。たとえば、「私が読む」は文字では4文字が並んでいますが、「私」は「が」と、「読」は「む」とくっついて、「私が」と「読む」という2つのまとまりを作っています。さらにその後ろに「本」をつけて「私が読む本」とすると、「私が読む」という全体に「本」がくっついていることが分かります。このような仕組みを<統語構造>といいます。構造の理解は人間の頭の中では無意識に行われるのですが、統語構造を操作する明確な規則の体系としてそれを再構成することにより、人間が言語を理解する過程を捉えることができます。「子供が本を読む。」という文は、おおよそ、次のようにカッコのまとまりごとに構造を成しています。

[[子供] が] [[[本] を] 読む]

このうち、一番外側の赤カッコの部分、「子供が」と「本を読む」は、それぞれ主語(名詞句)と述語(動詞句)に相当します。

このような構造についての情報が注釈付けされた言語データを大量に集積

したものが「統語・意味解析コーパス」です。本プロジェクトでは、現代語の書き言葉のデータに主語や目的語といった文法関係、名詞修飾構造、受身文、使役文、引用節、条件節などの副詞的な節といった文の統語・意味構造に関する様々な情報を注釈付けしたコーパス、NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese (NPCMJ)を開発してきました。

NPCMJは、日本語のさまざまな文法現象の使用実態を調べることを可能にすること、また、注釈付けされた情報に基づく日本語のコンピュータ解析を可能にすることを目的に開発されています。

文法現象の検索が可能に

ここで、文法現象の使用実態の調査の例をひとつ挙げましょう。「太郎が花子に(間接目的語:間目)チョコレート(直接目的語:直目)あげる」のような、2つの目的語を取る動詞の例についてNPCMJを検索してみました。

語順		出現数	割合
直目	間目	383	44%
間目	直目	490	56%

間目 < 直目 の語順の方がその逆よりも多く、このことは、大部分の研究者

のこちらを基本語順とするという意見と一致します。ところが、動詞「伝える」だけについて調べてみると、直目 < 間目 が10例なのに対し、間目 < 直目は8例です。基本語順については、動詞の種類ごとのよりきめ細かい調査により、再検する必要があるようです。このように文法情報を注釈付けしたコーパスの利用により、これまでに明らかにされなかった日本語の使用実態に迫ることができます。

プロジェクト終了の2022年3月時点で本コーパスは約9万文(130万語)規模に達する見込みです。データの構成も青空文庫、聖書、ブログ、書籍、国会会議録、エッセイ、フィクション、ノンフィクション、法律文、ニュース、会話、テッドトーク、辞書、教科書、ウィキペディアといった多様なジャンルからなるもので、オンライン上で複数の検索ツールとともに無償で利用することが可能です(<https://npcmj.ninjal.ac.jp/>)。是非試してみてください。

(プラシャント・パルデシ/国立国語研究所・教授、吉本啓/東北大学・名誉教授、長崎郁/名古屋大学・特任講師、アラスデア・バトラー/弘前大学・准教授)

PROJECT

特集:①多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓6基幹プロジェクト
日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成(プロジェクトリーダー 木部暢子)

危機言語・危機方言を 消滅から守れるか?

木部暢子

KIBE Nobuko

ウヌ クワーシュル テャーヌ イリコーヌ アタリバドゥ ナイル。

消滅危機言語の継承

消滅危機言語を記録し、その価値を地域の人や社会に訴え、その継承活動を支援するのがこのプロジェクトの目的です。ここで言う「消滅危機言語」には、ユネスコが指定した危機言語だけでなく、日本各地の方言も含まれます。プロジェクトでは、本土の方言を含む約40地点の言語の調査を実施し、記録してきました。

危機言語の記録は重要ですが、もっと重要なのは、言語が消滅しないよう継承していくことです。もし、言語が消滅せずに使われ続けるのであれば、言語の記録は時間をかけて、内容を充実させることができます。そして何より、言語が多様であることが人間の財産だからです。

しかし、どうやったら言語を消滅から守れるのでしょうか? 6年間を通じて、プロジェクトの最大の課題はこのことでした。

アホウドリの繁殖

先日、テレビを見ていて、絶滅危惧種のアホウドリを繁殖させる取組のことを知りました。アホウドリは、もとは伊豆諸島や小笠原諸島、尖閣諸島などに生息していましたが、羽毛を取るために乱獲が進み、ほとんど絶滅状態となりました。ところが、1951年に鳥島

でわずかに生息していることが確認され、観察と保護が進められた結果、個体数がかなり増えました。しかし、鳥島は火山の島です。噴火でアホウドリの生息地がなくなる恐れがあります。そのため、アホウドリを別の地域へ誘導し、生息地を分散させる計画が始まりました。

その方法が実にユニークです。デコイと呼ばれるアホウドリの実物大の模型を鳥島の別の海岸に置き、アホウドリの鳴き声を拡声器で流すことによりアホウドリを引き寄せるといった作戦です。これにより、2006年に新たな集団繁殖地が確認されたといいます(山階鳥類研究所HP)。

動植物の保護と言語の保護

動植物の保護活動は、言語の保護活動に比べてずっと進んでいます。条約で貴重動植物の輸出入が禁止され、これらを捕獲したり採取したりすると法律で罰せられます。また、環境省のHPでは「絶滅危惧種をなぜ守らなければならないか」について詳細に解説されています。

それに対し、言語の保護活動は国の政策としてほとんど行われていません。自治体によっては「方言の日」を設けたり、方言の使用を推奨したりしていますが、言語の保護に関する法律や条令はありません。また、文科省のHP

には、危機言語の保護について一言も書かれていません。

自分たちの力で言語の保存を

このような現状を考えると、自分たちの力で言語を守らなければなりません。そのとき、アホウドリの移住作戦が参考になります。例えば、YouTubeでは各地の方言動画がたくさん流れています。ネットという別の環境で音声を流すという点で、デコイ作戦とよく似ています。これに引き寄せられて、多くの人が方言を日常生活で使うようになれば、方言を消滅から守ることができるかもしれません(2月19日のNINJALフォーラムのポスター発表で参加者からこのようなアドバイスをいただきました)。また、方言を話す人形を作ることも現在の技術なら可能だと思っています。

言語が後世に残るか残らないかは、現在の私たちにかかっています。そのことをしっかりと意識して、暮らしていきたいと思っています。

参考資料

山階鳥類研究所HP

<http://www.yamashina.or.jp/hp/yomimono/albatross/03decoi.html>
(木部暢子/言語変異研究領域・特任教授)

特集:①多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓6基幹プロジェクト
通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開(プロジェクトリーダー 小木曾智信)

コーパスで 日本語の歴史を一望する

小木曾智信

OGISO Toshinobu

日本語歴史コーパス

このプロジェクトでは奈良時代以前から明治・大正時代までの千数百年の日本語の歴史を研究することのできる通時コーパスの構築を進めてきました。『日本語歴史コーパス (CHJ)』と名付けたこのコーパスは順調に構築が進み、計画以上の規模で公開されています (図1)。

登録ユーザーは2万人以上となり、年間50万回以上検索され、CHJを使った研究が毎年100件以上発表されるようになりました。最近では海外で発表される研究も増えてきました。

「まとめて検索KOTONOHA」を使えば誰でも簡単に単語の使用頻度の歴史的な推移を見ることができ、研究者以外の人にも使っていただけるようになりました。

コーパスが可能にしたこと

CHJの利用の広がり背景として、これまでは難しかった用例の調査が容

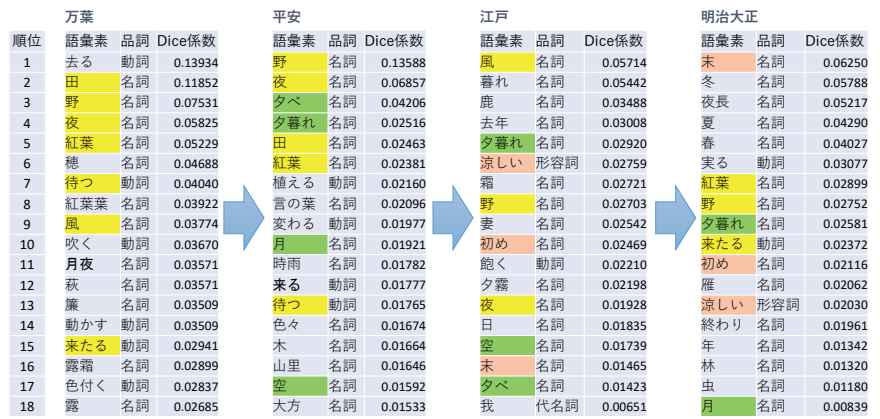


図2 「秋」のコロケーションの歴史的推移

易に迅速に行えるようになったことが挙げられます。従来、用例検索のために紙の本や索引を使って長い時間をかけて調査しなければならなかったものが、コンピュータ上でたちどころに結果を出して集計まで行うことができるようになりました。

このことは、単に調査・研究を楽にだけでなく研究の方法・内容にも変化をもたらしました。さまざまな試行錯誤が可能になったことで、コーパスをあれこれ検索・集計する中から発見を見いだしていく新しいタイプの研

究・コーパス駆動型の探索的研究が増えてきました。

統計的な見方の導入

資料に現れる全ての語を考慮に入れて統計的な調査が行えるようになったのも新しい点です。上の図は時代ごとに「秋」という語と結びつきの強い語を調査した結果です。コロケーション強度という指標を用いることで、千年以上も変わらずに結びつきが強い語が残る一方で、時代ごとに新しい結びつきが生まれ次代へ引き継がれていることが分かります。

このような見方は、近年注目されている自然言語処理技術を使った言語変化の研究につながるものです。今後、こうした新しい方法を導入しCHJを活用した研究が発展していくことを期待しています。

(小木曾智信/言語変化研究領域・教授)

奈良時代	■万葉集 (9.8万語)	■宣命 (1.8万語)	■祝詞 (0.9万語)	
平安時代	■仮名文学 (85.7万語)	■訓点資料 (0.9万語)		和歌集
鎌倉時代	■説話・随筆 (71.3万語)	■日記・紀行 (11.0万語)	■軍記 (28.1万語)	和歌集 (26.2万語)
室町時代	■狂言 (23.5万語)	■キリシタン資料 (12.3万語)		
江戸時代	■洒落本 (20.4万語)	■人情本 (37.3万語)	■近松浄瑠璃 (23.1万語)	
	■随筆・紀行 (1.4万語)			
明治・大正	■雑誌 (1274.8万語)	■教科書 (70.9万語)	■明治初期口語資料 (20.1万語)	
	■近代小説 (69.7万語)	■新聞 (38.6万語)	■落語SP盤 (9.3万語)	

図1 日本語歴史コーパス 収録資料と語数

特集:①多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓6基幹プロジェクト
大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究(プロジェクトリーダー 小磯花絵)

コーパスを用いて 日常のことばの特徴を調べてみよう

小磯花絵

KOISO Hanae

家族と旅行

車で家族と買物

友人と外食

同僚と打上げ

イベント

話し言葉のコーパスの拡充

日常会話を中心に話し言葉の特性を分析できる大規模なコーパスを構築・公開することを目標に、プロジェクトの活動を進めてきました。200時間の会話を映像を含めて公開する『日本語日常会話コーパス (CEJC)』のほか、『国会会議録』や『昭和話し言葉コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』小説会話文の話者情報など、この6年間で多様な話し言葉の研究資源を公開することができました。詳細は本誌6号(6~9頁)をご覧ください。

こうしたコーパスを活用して、どのようなことが分かるでしょうか。ここでは、副詞「やはり」の語形「やはり/やっぱり/やっぱりし/やっぱり」がどのように用いられているかを、複数のコーパスを活用して調べてみようと思います。

「やっぱり」使っちゃうよね

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』とCEJCを用い、書き言葉と日常会話を比べてみました(図・左)。白書では「やはり」しか用いられていないのに対し、新聞、ブログとなるにつれ「やっぱり」が増え、ブログでは「やっぱり」の使用が見られます。一方、日常会話では、議会会合のような比較的改まった場でも「やはり」はあまり用いられず、雑談にいたってはほとんど使用されません。代わりに用いられるのは「やっぱり」「やっぱり」で、特にブログと比べて「やっぱり」の使用の多さが目立ちます。

「やっぱり」若い人が使う?

日常場面ではどの世代の話者がどの語形を使っているのでしょうか(図・中)。結果から、若い人ほど「やっぱり」を用いており、10~20代では約65%が「やっぱり」を用いていることが分かりま

す。ただ世代が上がっても「やはり」の使用はほとんど見られず、70歳以上の方も「やっぱり」を約40%とかなり多く用いているようです。

昭和でも「やっぱり」使う?

『昭和話し言葉コーパス』のうち1952~69年収録の会話と2016~20年収録のCEJCを比べると、昭和中期から平成末~令和初頭に至る約60年で「やっぱり」の使用が格段に広がり、「やはり」の日常場面での使用がほぼ見られなくなっていることが分かります。

コーパスを調べてみよう

話し言葉のコーパスの拡充により、話し言葉を様々な角度から調べることができるようになりました。今回取り上げたコーパスはいずれもオンライン検索システム「中納言」で調べることができます。

(小磯花絵/音声言語研究領域・教授)

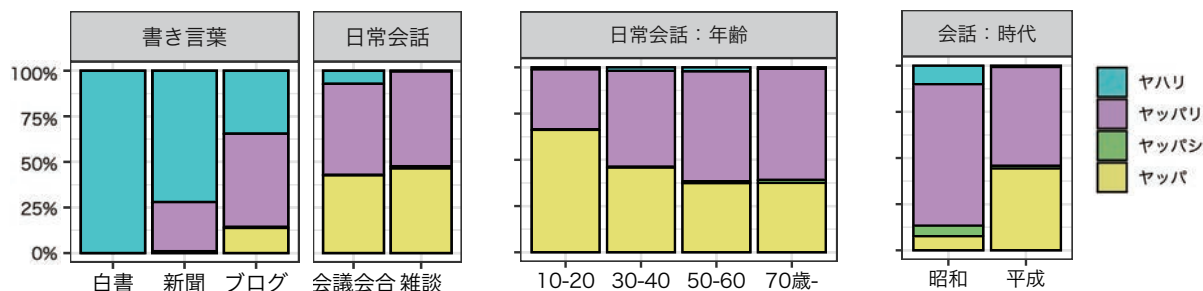


図1 「やはり」の語形:書き言葉・日常会話の比較(左)、話者の年齢別の比較(中)、収録した時代別の比較(右)

特集:①多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓6基幹プロジェクト
日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明(プロジェクトリーダー 石黒圭)

外国人の日本語を解明する

中国語・韓国語母語の
日本語学習者縦断発話コーパス

石黒 圭
ISHIGURO Kei

検索画面

多言語母語の
日本語学習者横断コーパス

研究詳細

検索

中国語母語話者3名、韓国語母語話者3名、計6名の日本語学習者を2年間縦断的に調査し、そのデータを収集し、発話コーパス

日本を含む20の国と地域で、異なる12言語を母語とする日本語学習者1000人の話し言葉および書き言葉を収集

外国人の流暢な日本語

一昔前は外国人が日本語を話すこと自体が珍しく、日本語が流暢な外国人を見ると、「日本語がお上手ですね」などと、ほめたものでした。

しかし、今は学校に行っても会社に行っても、日本語が上手な外国人がふつうにいる時代です。外国人（より正確には日本語を第二言語とする人、以下、学習者）の日本語のレベルは確実に上がりました。もちろん、そこには本人のたゆまぬ努力があったことが第一の要因ですが、その背景には学習者に日本語を教える日本語教育のレベルの向上があります。

外国人の変な日本語

しかし、日本語教育的な発想が日本語をおかしくすることもあります。「こんにちは。私の名前は〇〇です。ベトナムから来ました。△△と呼んでください。」という自己紹介の挨拶は、日本語として間違っていないのですが、少し変だと感じます。「あっ、私からですか。はい、〇〇と申します。えっと、ベトナム人です。△△と呼んでもらえたら嬉しいです。」ぐらいが自然でしょう。どうしてこうしたことが起きるかと言うと、日本語の教科書の例文が型にはまったものだからです。

また、学習者自身が第一言語の発想

を借りて話すことにもその一因があるでしょう。学習者が教科書で習った日本語を自前の発想で組み立てると、どうしても不自然な文になりがちです。こうした学習者の不自然な日本語と、日本人の自然な日本語の溝を埋めるには、どんな研究が必要でしょうか。学習者の話す日本語を集め、それを日本人の日本語と比較する研究が必要だと私たちは考えました。

会話コーパス I-JAS

そこで、本プロジェクトでは、二つの会話コーパスを第三期に構築しました。一つはI-JAS（『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』）という、学習者の話す日本語を集めたコーパス、もう一つはBTSJ（『BTSJ日本語自然会話コーパス』）という、学習者と日本人の日本語を比較できるコーパスです。

I-JASは、日本を含む20の国と地域で、異なる12言語を話す日本語学習者1000人の話し言葉の日本語を収集したコーパスです。I-JASを使うと、外国人の日本語の国際比較ができます。たとえば、お願いがあるとき、「お願いしたいのですが…」のような言いさし文を好む日本語母語話者、ややそれに近い韓国語話者、「お願いできますか?」のような質問文を好み、言いさしを好まない英語話者や中国語話者、「お願いします。」のような平叙文を含

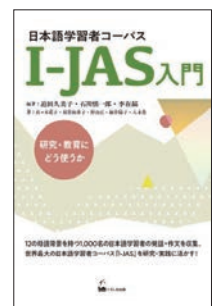
めてどれも使うスペイン語話者やフランス語話者といった面白い傾向が見えてきます。

会話コーパス BTSJ

一方、BTSJは、話し手と聞き手の上下・親疎などの人間関係や、談話の大きな流れや文脈を考慮した900人の450会話からなるコーパスです。「～あるよ」のような話し方を中国人はほんとうにするのか、接触場面と呼ばれる外国人と日本人とが出会ったときお互いにどんな話し方をするのか、といったことがわかるコーパスです。

この二つのコーパスが完成したことにより、〇〇人の日本語の特徴や日本人の自然な日本語との相違などが実証的に検討できる環境が整い、学習者の話す日本語の不自然さとその原因の解明に役立つことが期待されています。

(石黒圭／日本語教育研究領域・教授)



広領域連携型基幹研究プロジェクト

「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

方言の記録と継承による 地域文化の再構築



宮崎県椎葉村の棚田

2011年3月の東日本大震災で東北地方や関東地方は大きな被害を受けました。その復興をめざして、2012年に「大規模災害と人間文化研究」がスタートしました。その後、災害に限らず過疎化などで急速に変貌しつつある地域社会の再構築をテーマとする研究に再編成され、このプロジェクトとなりました。人文機構の5機関が歴史学、民俗学、言語学、文学、環境学の視点から6年間、このテーマに取り組みました。

国語研ユニットの課題は、方言を如何にして地域の活性化につなげるかです。プロジェクトでは、これまで交流のあった宮崎県椎葉村や鹿児島県沖永良部島和泊町・

知名町と協力して、地域の人と一緒に方言を記録したり方言のイベントを開催したりして、方言の良さを再認識してもらう活動を行いました。椎葉村ではその成果として、近々、『椎葉村方言語彙集』を刊行します。語彙集には単語の意味だけでなく例文を豊富に盛り込み、できるだけ日常生活が感じられるようにしています。今後は、椎葉のみなさんがこの語彙集をさらに充実させてくださり、私たちはそのお手伝いができれば、と思っています。

(木部暢子／言語変異研究領域・特任教授)

広領域連携型基幹研究プロジェクト

異分野融合による「総合書物学」の構築

表記情報と書誌形態情報を 加えた日本語歴史コーパス の精緻化

このプロジェクトは、国文学研究資料館、国立歴史民俗博物館、国際日本文化研究センター、国立国語研究所の4機関による共同研究「異分野融合による「総合書物論」の構築」のもとで実施されました。国立国語研究所は、書物に書かれた文字言語を媒介に、言語と書物とをつなぐための研究を行いました。

具体的には、表記上の特徴がある古典作品を対象として、コーパスを作成し公開しました。「人情本コーパス」では当て字、「延喜式祝詞コーパス」では宣命書き、「訓点資料訓読文コーパス」ではヲコト点などの訓点についてそれぞれ構造化記述の方法を考案し、『日本語歴史コー

1B000

Kana Supplement

	1B00	1B01	1B02	1B03	1B04	1B05	1B06	1B07	1B08	1B09	1B0A
0	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ
1	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
2	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア

Unicode 10.0 のコード表
(変体仮名部分の一部)

パス』に収録されました。

また、コンピュータで表現しにくい文字であった変体仮名を、情報処理推進機構との連携により、国際文字コード規格Unicodeに追加提案する活動も行いました。2017年6月に出版されたUnicode 10.0に、変体仮名286文字が新たに収録されました。

(高田智和／言語変化研究領域・教授)

北米における日本関連在外 資料調査研究・活用

19世紀末以降、南北米に移民として日本から多くの人々が渡っていきました。そうした人たちの生活の中で生まれたさまざまな資料が現地の博物館、資料館、文化センター、大学などに保管されています。それらの資料は現地の日系社会の生活や歴史を知る上でたいへん重要なものです。ただ、現地では日本語の資料を整備するスタッフが不足するなどして、特に音声・映像資料の中には劣化や廃棄リスクが高まっているものが数多く存在します。このプロジェクトでは、これらのデータを保存するとともに、そこに記録された内容をもとに、これまでの日系社会の社会生活史であまり話題にされてこなかつ



「ハワイ出身の沖縄移民二世比嘉トーマス太郎」の展示
(沖縄県北中城村)

沖縄の言葉でガマに隠れている住民に投降を呼びかけ、多くの命を救ったことが沖縄とハワイでは長く語り継がれています。

たテーマについて調査研究を行ったり、展示やシンポジウムを開催したりしています。

(朝日祥之／言語変異研究領域・准教授)

コーパスアノテーションの 拡張・統合・自動化に関する 基礎研究

コーパス開発センターでは、コーパス検索系『中納言』『まとめて検索 KOTONOHA』の整備・開発と並行して、コーパス基礎研究共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」を進めています。所外の研究者とともに音声班・統語班・意味班の3つに分かれて、先進的な言語資源整備に関する研究を進めました。音声班はリアルタイムMRI動画撮像技術を用いて日本語の調音運動を観測した『リアルタイムMRI調音運動データベース』を構築しました。調音音声学における新しい客観データとして期待されています。統語班は言語横断的な依存構造ツリーバンク構築プ

ロジェクト『Universal Dependencies』に参画し、日本国内の研究者の取りまとめを行うとともに日本語 Universal Dependencies 言語資源を整備しました。同データは言語類型論・心理言語学で利用される世界最大規模のツリーバンク集となっています。意味班は『分類語彙表』に基づく語義データベースの構築を進め、国語辞典語釈・形態素解析辞書との対応付けや、単語親密度情報付与を進めました。また、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『日本語歴史コーパス』の一部に対して、語義ラベルとして分類語彙表番号を付与しました。

いずれの研究も工学系研究者とともに深層学習に基づく言語資源構築の自動化についても研究しました。さらに、企業との共同研究を進め、様々なオープンソフトウェアとしての言語解析器を公開しました。

(浅原正幸／コーパス開発センター・教授)

「意味の語形変化」

をめぐって

近藤泰弘 KONDO Yasuhiro

単語の意味が変化していくことはどんな言語にもあることだが、その変化を記述するには、二つのやり方がある。一つは、例えば「おかし(い)」という語形の意味が〈情緒がある〉から〈笑える〉に変わるというような方法である。もう一つは、〈秋によく飛ぶ透明の羽のある虫〉のことは、昔は「あきつ」という語形で表現したが、今では「トンボ」と言う、というような方法である。前者は、語形の持つ意味の変化を記述し、後者は、ある意味にあたる語の語形の変化を記述している。これは単語の意味変化記述の裏表で、どちらの方法が正しいというものではないが、実際には前者の方がわかりやすく、よく使われる。『日本国語大辞典』(小学館)のような大型の通時的な辞書も当然前者のスタイルをとっている。『現古辞典』(河出書房)と言って、現代語から古語を検索するような辞書があり、これは後者の方向だが、抽象的な意味体系の歴史までを構築しているわけではない。最近、ある小型辞典の改訂版のキャッチフレーズに「「エモい」は「あはれ」の子孫です。」というのがあったが、これも、やや形を変えた『現古辞典』的な示し方である。

ソシユールのチェス盤の喩えで言えば、「意味」はある時点のチェスの盤面の配置から生じるのであって、いわば、それぞれの盤面の状態そのものである。複雑な盤面(文脈)から生まれる、そのような「意味」の方をメインに通時的現象を観察することは非常に難しいのは当然であろう。

しかし、近年になって、個々の単語が文脈において持っている情報(チェス盤の盤面全体の情報にあたる)をそのまま意味として算出する、「単語の分散表現」という方法が生まれてきた。Word2vecという名前を聞かれたことのある方も多いと思うが、それがそのひと

つの方法である。これは単語の前後数十個の共起情報から、その単語の持つ意味情報を深層学習で計算し、数百次元のベクトルに表現するもので、かつて広く行われた意義素研究と少し似ている。意義素とは、単語の意味の弁別的特徴を文脈からいくつかの二項対立の特徴に還元する研究で(注1)、「寒い」は[快不快-](=不快だ)だが、「涼しい」は[快不快+](=快適だ)、というような具合である。新しい分散表現研究とは、+か-ではなくアナログ的な数値を持って、かつ、各語形にその特徴が数百個あるイメージを考えていただくといいたい。計算されたベクトルの各次元が何を表すかはわからないが、ベクトルの値が加減算できたりで、相互の意味の体系を知ることができるところに特徴がある。これを使えば、意味に関する通時的な研究を行うことができる可能性が出てきており、すでに、日本語の単語の「語形の持つ意味変化」の研究も始まっている。(注2)

ここでは、それを「意味の体系の変化」に応用してみよう。たとえば、次の図1は、『源氏物語』のシク形容詞をWord2vecによる100次元のベクトル表現とし、機械学習で次元圧縮して(いわゆる主成分分析)、2次元の散布図に展開したものである。図2も、同じように現代語の、シイを語尾とする形容詞を同様に処理したものである。比較しやすいように、どちらも「シイ」の現代語語形で表示した。古典語の「シク活用形容詞」は特に奈良時代では、一般に感情表現を担うという説(注3)が有力であるが、二つを通覧すると、同じシク活用の中でもやや意味が異なる部分があることがわかる。2色に色分けしてあるのは、教師なし機械学習のK-Meansで2クラスに分けたものだが、2図見比べていただくと、おおよそ似た体系になっており、左側

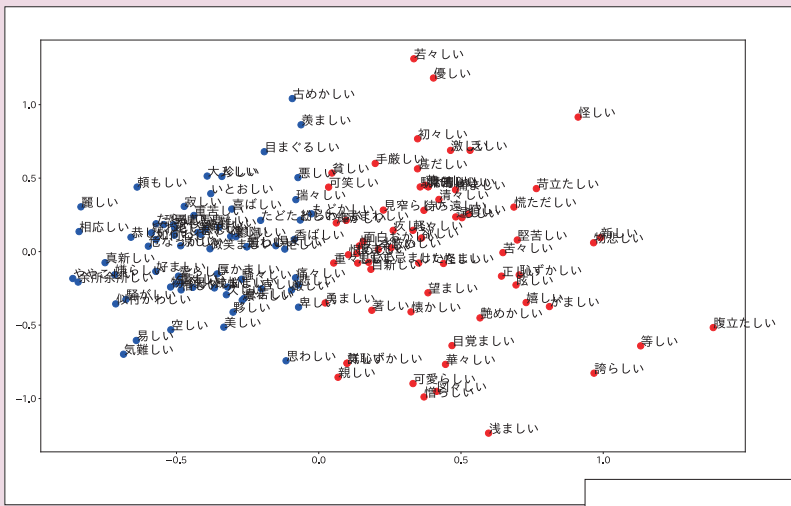


図1

(青丸)がより主観的な表現であり、右側(赤丸)がやや客観的な表現になっていることがわかる。また、古典語では目盛りの数値を見るとわかるように狭い範囲に分布しているのに対し、現代語では、左の固まり(主観的部分が集中)と、それ以外とで分離した状態になっていて、元のシク活用形容詞の意味領域が広範囲に拡大していることがわかる。また、個別には、例えば「美(い)」が、古典語では主観的(青)の方にあるのに対し、現代語では、客観的(赤)の方に位置しているのも、「美(い)」の一般の語史研究(「可愛らしい」から「美的である」への変化)と整合する。

時代ごとにこのように分散表現のモデルを作って並べていき、ある程度その枠組みが見えて、その枠組みの形の変化や所属語形を記述できるようになれば、それがこの場合〈「主観性」に関わる意味体系の語形の変化〉ということになる。この枠組みをさらに細分化していくことで、今まで非常にとらえにくかった、意味の類型の通時的な変化が、コンピュータとコーパスを駆使して記述できる方向が見えてきた。非常に発展性のある研究分野であると考えている。(注4)

(注1) 国広哲弥「日英温度形容詞の意義素の構造と体系」(『国語学』60集・1965)など。

(注2) 相田太一他「単語分散表現の結合学習による単語の意味の通時的変化の分析」(言語処理学会・

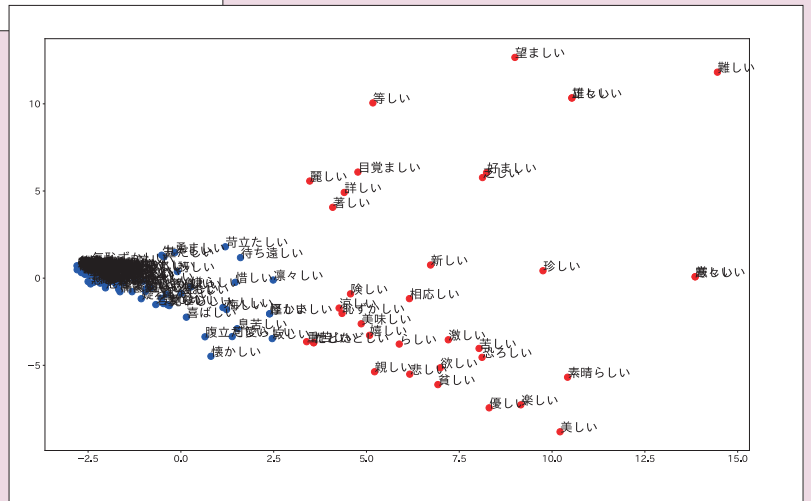


図2

26回年次大会・発表論文集・2020)などが日本語研究における一例である。

(注3) 山本俊英「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」(『国語学』23集・1955)が最初の研究。

(注4) なお、本コラムの研究の詳細は、『メタファー研究3』(ひつじ書房)に掲載予定である。また、学術振興会科学研究費(基盤C)19K00629の研究成果の一部を含む。データとしては、国語研のBCCWJとCHJの原データを用いた。



こんどう やすひろ ● 青山学院大学教授。専門は日本語学・日本語史・コーパス言語学。



研究者紹介 024

井上文子

言語変異研究領域 准教授

方言談話資料との出会い

いのうえ ふみこ ● 1959年大阪府出身。高知女子大学で国語学・方言学を、大阪大学大学院で社会言語学・方言学を学ぶ。大阪大学助手を経て、国立国語研究所には1995年より在籍。

— 研究の道に進まれたきっかけを教えてください

生まれ育った関西を離れ、高知市で暮らすようになったことが、方言研究の世界に入るきっかけになったと思います。いっしょに大学に通う友人たちのそれぞれの出身地の方言。耳慣れない高知弁。自分は使わない語形に注意を引かれ、最初はただ興味本位でまねをしていました。

ある日、雨が降っているのを見て、「雨降っチュー」と言ったところ、高知出身の友人に「雨降りユー」だと訂正されました。現在雨が降っている時には「雨降りユー」で、「雨降っチュー」というのは、今は降っていないけれども、地面が濡れているのを見て、雨が降っていたことがわかったときの表現だと。また、こういうこともありました。香川出身の友人に「何しヨルん」と言われるたびに、私は不快な思いをしていました。私の出身地の大阪では「ヨル」は相手を下に見ることばだったからです。ですから、私はその友人から少しばかりにされているのかなと感じていました。けれども、ある時、香川の「ヨル」は単なる現在進行形なのだとなりました。さらに、香川では「ヨル」と「トル」で進行と結果の区別を表しますが、その区別は高知ほど完全ではなく、「ヨル」で表される進行を「トル」でも表現することもわかりました。

このようなアスペクトを表す形式が方言によってさまざまであり、その区別のしかたも地域によって異なることに初めて気がつきました。大阪の卑語的な「ヨル」と香川の待遇的には中立の「ヨル」が接近した地域に存在していることにも驚いたものです。すべてが新鮮で、方言のおもしろさにどんどん惹かれていきま

した。

— これまでどのようなご研究をされていきましたか

方言のアスペクトをテーマにしてフィールドワークを積み重ね、各地方言の形式や枠組みを比較・対照し、その分布からアスペクトの変化の方向を考えました。進行と結果を区別しなくなるという変化が、西日本方言に見られる大きな流れだと捉えられること、関西の卑語の「ヨル」は歴史的に新しく、アスペクトの進行と結果の統合に関わって発展したものだということ、現在のアスペクト形式の分布は文献上の歴史的变化と相関することなどを確認することができました。

東京に住むようになると、アクセントやイントネーション、語彙などの違いはもちろんですが、話の進め方や会話の際のリアクションに違いを感じるが増えました。もちろん個人差はあるでしょうが、会話パターンにも地域的な特徴がありそうだという直観がありました。このテーマに興味がある研究者たちと、共同でロールプレイ会話を収録して、そのデータを基に、各方言における談話構造や談話展開の地域差・年代差・性差・使用メディアによる差などを考察しました。収録したロールプレイ会話は、『方言ロールプレイ会話データベース』(<http://hougen-db.sakuraweb.com/>)として公開しています。

— 今はどのようなことにご関心があるのですか

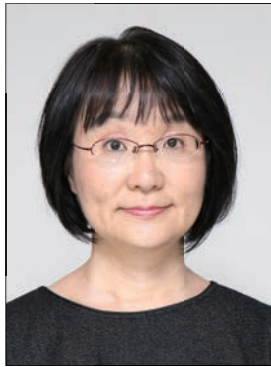
大学院時代に、質問紙による調査ではなかなか出てこない形式が、地域の会話を記録した談話資料にはたくさん現れる

という経験をしてから、ずっと方言談話資料の重要性を強く感じています。さいわいにも、研究所で、文化庁「各地方言収集緊急調査」の録音カセットテープと手書きの文字起こし原稿に出会いました。統一した方法で収録された全国規模の膨大な方言談話資料です。当時、これらの資料は保管されているだけで、ほとんど世に出ていませんでした。それをみんなが使えるようにしたいと思いました。

ただ、もともとの形態のままでは利用が難しいので、カセットテープの録音音声デジタル化し、手書きの文字起こし原稿を入力して、ひとまとまりの談話としてセットにすることにしました。約200地点ありますが、かなりのところまでたどり着きました。この方言談話資料の整備が、研究所でのライフワークとなっています。以前、資料の一部を『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』として刊行しましたが、現在、整備したデータは、「日本語諸方言コーパス」のための基礎データとなっています。

— 今後のご研究について教えてください

受け継いだ資料を使いやすい形で多くの方々に利用してもらえるように、引き続き、データの整備と保存・公開・活用に力を注ぎたいと思います。その方言談話データを、現在参加している、歴史的言語変種と地域的言語変種に現れる文法的言語変異の対照研究にも役立てたいと考えています。



研究者紹介 025

柏野 和佳子

音声言語研究領域 准教授

言葉の用例収集、観察、分析に、ワクワクが止まりません

かしのわかこ ● 1969年東京都出身。東京女子大学で国語学を学び、富士通株式会社を経て、1998年より現所属、2009年より現職。現職中に東京工業大学にて博士号(学術)取得。『岩波国語辞典』『広辞苑』の改訂にも携わる。

— 研究の道に進まれたきっかけを教えてください

きっかけは、大学3年生より、水谷・丸山ゼミに所属したことです。

『岩波国語辞典』の編者でもあった水谷静夫先生と、IBMでの研究職を経て大学に戻られた丸山直子先生から学ぶ国語学の面白さに魅了されました。今ほど普及していなかったパソコンを活用したユニークなアプローチで日本語の文法や意味に迫りました。

当時、企業では機械翻訳やワープロ仮名漢字変換の研究が盛んに行われ、そういった企業にゼミの卒業生が研究者として就職していました。ゼミに入りたての頃は、研究者という響きに漠然とあこがれたものの、研究は黙々とするものとのイメージでいたため、幼少時よりとにかくおしゃべり好きだった自分には向いていないだろうな、と思っていました。

ところが、3年次にIBMで1年かけて約3,000文の用例分析をするというアルバイトの機会を得た際に、黙ってコツコツしたその作業がとても楽しかったのです。卒業論文で取り組み始めた「指示語の研究」も楽しくなっていました。そのような時に、水谷先生の紹介で富士通に勤めていた卒業生の橋本三奈子さんに会いに行きました。研究はチームで進めるものなので、当時つとめていたゼミ幹事のような仕事だと説明され、それなら得意かも、と思い、研究の道に進みました。

— 最初に入社された富士通ではどのような研究をされたのですか

通産省の外郭団体である情報処理振興事業協会へ出向し、言語処理用の基

本名詞辞書の構築に携わりました。例えば「車」について「が走る」「を洗う」「に乗せる」といった用例や、修飾関係の語、複合語など、数多くの用例・用法を記載する辞書です。

はじめは私が担当する辞書項目はなく、見出し語の「備考欄」の整理を任されました。そこに、多義語の意味的關係(「今日は天気だ」の「天気」は、広い意味の「天候」のうち狭い意味の「晴れ」を指すなど)を書くことを思いつき、当時大学院生だった本多啓先生と共に取り組みました。それが博士論文につながる研究の第一歩になりました。

— 国語研ではどのような研究をされたのですか

はじめは、『分類語彙表』の増補改訂や外来語の調査に加わりました。その後、書き言葉や話し言葉の「コーパス」(言語データベース)の構築にずっと携わっています。

書き言葉コーパスを用いては、和語や漢語でカタカナ表記される語の使用調査をしました。「モテる」「ネタ」「コツ」「カッコ」などです。また、現代語の文脈中に現れる古風な表現の使用調査をしました。「なきにしもあらず」「いわずもがな」「推して知るべし」などがよく使われています。

話し言葉コーパスを用いては、「僕」より「俺」が多く、「わたし」より「あたし」と言っている、といった調査をしました。また、会話の冒頭に現れる相づち表現には「でしょ」「だろ」「あるある」「別に」「無理」など、多種多様なことを調査しています。

— 今はどのようなことにご関心があるのですか

大学生の頃より「辞書」への興味関心を持ち続けています。それは、言葉をどうとらえて、どう理解するか、また、どう説明するか、ということへの関心です。つまり「言葉をもっとよく知りたい」ということです。実際の言葉の使用を観察・分析することはもちろん、複数の国語辞典を読み比べることも楽しく、日々、行っています。

新語や新用法、言葉の意味の変化に強い関心があります。話し言葉と書き言葉の差異をはじめ、場面や状況、使用者によつての言葉遣いの差異にも、とても興味があります。つい最近ではネット記事の見出し「弁当大手とコンビニ 胃袋争奪戦か」が気になりました。この「胃袋」は「飲食客」を指すとの説明が可能だろうかと考えています。

— 今後のご研究について教えてください

来年度より、「学習者用辞書」をテーマにするプロジェクトを始める予定です。国語教育、日本語教育において、日本国内はもちろん、海外の学習者にも利用してもらえるような辞書資源の構築を目指し、まずは、学習に必要な語の選定に着手予定です。

言葉はコミュニケーションの大事なツールであり、言葉を知るとは、理解力と発信力、どちらの強化にもつながります。そしてそれは、とても楽しいことだと思っています。「言葉をもっとよく知る」ための研究を続け、その楽しさの発信にも力を入れていきたいと考えています。



研究者紹介 026

福永 由佳

日本語教育研究領域 准教授



ことばの研究という営為に 真摯に向き合いたい

ふくなが ゆか ●金沢市出身。ウィスコンシン大学大学院で日本語教育学を学び、早稲田大学大学院日本語教育研究科で博士号を取得。国内外の教育現場で日本語を教え、1998年より国立国語研究所で日本語教育の教師研修や基礎研究などに携わる。2021年より現職。

— 研究者の道に進まれたきっかけを教えてください

アメリカの大学院で学んでいたときに、大学の日本語講座とエクステンション講座で日本語を初めて教えました。エクステンション講座は地域の人たちに公開されているので、若い学生が多い大学の講座では出会うことのない大人の手ごわい受講生（日本文化に興味のあるご夫婦、祖父と同世代の男性、障がいのある方等）に、新米の日本語教師は悪戦苦闘しました。でも、そのおかげで、教授法や教育理論が教育現場では万能ではないこと、多様な日本語学習者を理解することの大切さを学びました。今思うと、この経験が日本語教育学の研究に進むきっかけだったように思います。

— これまでどのようなご研究をされてきましたか

東京都北区にあった国語研究所に採用され配属された部署では「日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成」という大型共同研究プロジェクトが進行していました。日本語教育の一線で活躍されている先生方が参加され、研究会では熱い議論が交わされていました。私自身もいくつかのプロジェクトに参加したのですが、日本語学者の学習環境に関する共同研究で、今でも忘れられない経験をしました。それは中国帰国者の高齢のご婦人にインタビューしたときのことです。私は何も考えずいつものように日本語学習の理由を質問したところ、その方は「日本人だから日本語を学ぶのはあたりまえですよ」と答えられたのです。その不思議そうな顔を目にし、「日本人である私が日本人であるご婦人になぜ

このような質問をするのか」と内省し、いったい自分はこの場で何者なのかとアイデンティティの喪失を強く感じました。研究という営為に真摯に向き合う覚悟を問われた忘れられない出会いでした。

独立行政法人時代に取り組んだ研究課題は、「日本語教育における学習項目一覧と段階的目標基準の開発」です。日本に暮らす外国出身者の増加等を背景に、地域社会に生きるために必要な日本語能力（生活のための日本語）を改めて明らかにし、日本語教育関係者に利用しやすい形で提供することを目指しました。「生活のための日本語」を明らかにするためには、日本語に接触する場面、日本語学習ニーズ等について情報収集し、実態を把握する必要があります。その一環として、全国規模の質問紙調査「生活のための日本語：全国調査」を実施しました。さらに、インタビューやダイアリー調査の質的調査も行いました。これらの調査の過程で出会ったのは、エスニックコミュニティの中心として長年同胞を支援している女性、専門学校を卒業後レストランの店長として日本人部下を指導している男性、日系IT企業で働く若いカップル、離婚をしようと悩んでいる女性等。そして、日本人が期待するレベルの日本語の使い手でなくとも、たくましく生きる様相を垣間見たことが次の博士論文の研究につながりました。

パキスタン出身者のエスニックビジネス等については、研究の蓄積があるのですが、多言語多民族国家から移住して来た彼らが日常生活でどのように言語を使い、社会にどのように参加しているのかに興味を持ちました。そこで、日本に暮らすパキスタン人家族の言語の使用と学

習について量的・質的調査を行いました。研究の結果、日本の生活でも複数の言語を駆使し、日本語能力が低くとも社会的な活動には積極的である等の知見を得て、「成人教育（adult education）としての日本語教育」を提言しました。

— 今はどのようなことにご関心があるのですか

コロナ禍のなかでも日本で学び、働き、生活をしている外国出身の方々の言語生活に関心を持っています。日本語を含むさまざまな言語が飛び交うフィールドに通って、お話を聞いたり、看板やレストランのメニューなどの多言語景観を観察したりしています。

— 今後のご研究について教えてください

二つのことに取り組むつもりです。一つは、日本に住む人々の「言語レパートリー」（日常生活において使用・接触によって形成される言語的資源の総体）の研究です。日本語と外国語を使う外国出身の方々だけではなく、日本人も「標準語と方言」という多言語状況にありますから、日本人と外国人を区別せずに複数の言語（変種）の使用や接触を総合的に調査しようと考えています。もう一つは、文字学習の機会が少ない生活者としての定住外国人が、文字社会の日本において行っている「よみかき実践」についての研究です。日本は、リテラシーについての議論が諸外国に比べてとても遅れているといわれていますから、日本人にとっても意義のある知見を得られるよう力を尽くすつもりです。

Book Review

著書紹介

日本語の大疑問

眠れなくなるほど面白い ことばの世界
国立国語研究所 編

幻冬舎
2021年11月



日本語、面白い！

例えば、今や全国津々浦々に浸透した感のある〈クールビズ〉。対して、昭和五十年代の〈省エネルギー〉は殆ど一顧だにされずに消えていった。その敗因を本書ではこう分析する。曰く、「格好良い」という意味も併せ持つ〈クール〉と耳新しい〈ビズ〉を組み合わせて、《しゃれた新鮮な響き》をまとった〈クールビズ〉。一方、《「省エネ」は直接すぎる表現であり、また「〇〇ルック」という言い方は既に使い古された陳腐な感じが漂っていたと思われます》。

この切れ味！ この説得力！

或いは、最近略語が多過ぎやしない

か？ といった問いには、「テレビ」が「テレビジョン」の略語であることを意識している人は殆どいないだろうと例示した上で、服装に正装と略装があるように、正式名称と略称も場面に応じて使い分けでは？ と提案する。

こんな具合に本書には、日本語の乱れを糾弾するのではなく、むしろその変遷を面白がるかの如き気配が横溢する。だから肩が凝らないし、どの項目もストンと腑に落ちる。更には、仕入れた知識を得意気に吹聴したくなったりもする。

恐らくネタはまだまだ尽きないだろうから、続編も期待したい。

▶ 沢田史郎 (丸善 お茶の水店)

一般言語学から見た 日本語のプロソディー

鹿児島方言を中心に
窪園晴夫 編

くろしお出版
2021年3月



アクセント、イントネーション、リズムなど、語以上のレベルにおける音声特徴を「プロソディー」と言うが、中でも日本語のアクセントは方言差が大きく、典型的にも多様であることはよく知られている。しかしながら、従来の研究は日本語の中だけで論ずる傾向があり、いわゆる一般言語学の立場から日本語の諸変種を位置付けるとどうなるのか、そのような特徴を持つ日本語を研究することが一般言語学にどう貢献するのか、という視点は必ずしも十分ではなかった。

その視点を正面に据えて書かれたのが本書で、英語学から入り、日本語学、方言学（鹿児島方言）へと研究を広げてき

た著者ならではのものである。諸言語・方言が扱われるが、母方言の鹿児島県薩摩川内市方言と対岸の甕島方言の調査資料が中心をなす。

総論的な第1章で対象とした8項目中、アクセントの実現領域は語か文節か、などの4項目に両特徴が共存する特異な類型（ハイブリッド型）が見られ、他の項目でも日本語は実に多様性に富むことが述べられる。文末下降調で実現する鹿児島方言の疑問・呼びかけのイントネーションや若年層におけるアクセント変化、甕島方言の方言差も興味深い。多くの人に読んでほしい本である。

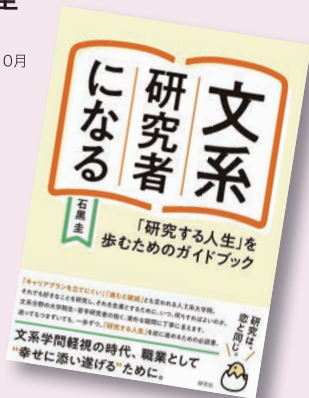
▶ 上野善道 (東京大学名誉教授)

文系研究者になる

「研究する人生」を歩むためのガイドブック

石黒圭

研究社
2021年10月



研究者を目指す人にとって、研究者になるには・なってからどういう仕事があるのかが分からないというのはかなり深刻な問題である。2000年代初頭には研究者向けの匿名掲示板があり、研究者（大学教員）なら分かる話題について赤裸々に書かれていた。だがあくまで匿名掲示板であり、信憑性や体系性に欠ける。そう、研究する人生を歩むにはあまりにも情報が不足しているのである。

本書は文系に焦点を当てて大学院に進学の決断から、学会発表、論文執筆、学位取得、研究職への就職、そして、就職後の授業・ゼミ運営での心構えや方法についてQ&A形式を用いつつ具体的に記

されている。

本書が特に優れているのが、出産や介護、経済的問題による研究の中断やハラスメントの問題に触れていることである。著者はこれらの話題に対し、冷静に中庸な助言をしている。また、人間関係の作り方や困り込み・放牧などといった指導教員のタイプごとの付き合い方など、他の人には聞きづらいことも丁寧に書かれている。本書はこれから研究者を目指す者にとって良きガイドとなることはもちろん、すでに研究者になった者にとっても自己を振り返るための本という意味で一読の価値があると信じる。

▶ 松浦年男 (北星学園大学)

編集後記

国立国語研究所では、2016年度から推進してきた第3期中期目標・中期計画期間を2021年度で終了します。そこで、今号では、第3期中期目標・中期計画期間の基幹研究プロジェクト

「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」を主軸として行ってきた種々の共同利用・共同研究の活動について特集①でご報告しました。もう一つの特集②では、基幹研究プロジェクトと並行して進んできた様々な研究プロジェクトの成果のエッセンスを取り上げています。表紙は、こうした成果を一目でご理解いただけるよう、6つの基幹研究プロジェクトとコーパス開発センターの基礎研究を加えた7つのプロジェクトが、「第16回NINJALフォーラム」(2022年2月19日 Web開催)にて研究成果を報告した際のPowerPointのスライドを並べています。これらの発表は、4月以降、動画配信する予定です。

書評では、現在好評をいただいている『日本語の大疑問 眠れなくなるほど面白い ことばの世界』(国立国語研究所 編)を含め、所員が編集執筆した書籍を3冊ご紹介しています。学術図書だけでなく、一般の書店でお買い求めになれる書籍もありますので、ぜひご覧ください。

2022年度からは、第4期中期目標・中期計画期間を開始します。国立国語研究所の新たな展開にご期待ください。
(福永由佳)

国語研 ことばの波止場 vol.11

2022年3月31日発行

編集 国立国語研究所研究情報誌編集委員会
〔 柏野和佳子(委員長) 井上文子 五十嵐陽介
福永由佳 横山詔一 松本曜 〕
発行 大学共同利用機関法人
人間文化研究機構
国立国語研究所
〒190-8561
東京都立川市緑町10-2
電話0570-08-8595(ナビダイヤル)
協力 くろしお出版
デザイン 黒岩二三[Fomalhaut]